

一夕

永井荷風

青空文庫

一 小説家二、三人打寄りて四方山よもやまの話したりし時一人のいひけるはおよそ芸術を業とするものの中にて我国当世の小説家ほど気の毒なるはなし。それもなまじ西洋文学なぞうかがひて新しきを売物にせしものこそ哀れは露のひぬ間の朝顔、路ばたの槿むくげの花にもまさりたれ。もし画家たりとせんか梅花ばいかを描きて一度名を得んには終生唯梅花をのみ描くも更に飽かるる虞おそれなし。年老いて筆力つかるれば看るものかへつて俗を脱したりとなし声価いよいよ昂あがるべし。俳優には市川家十八番の如きお株といふものあり。演ずる事たびたびなれば、観客ますます喜びてために新作を顧かえりみの暇いとまなきに至らしむ。音曲おんぎよ家くかについて見るもまた然らずや。聴衆の音曲家に望んで常に聴かんと欲する処はその人によりて既に幾回となく聴馴れしもの。即荒木古童が『残月』、今井慶松が『新曲晒し』、朝太夫が『お俊伝兵衛』、紫朝が『鈴ヶ森』の類これなり。神か田伯山扇を叩けば聴客『清水の治郎長』をやれと叫び、小さん高座こぼに上るや『睨み返し』『鍋焼うどん』を願ひますとの声しきり頻にかかる。小説家の新作を出すや批評家なるものあつて何々先生が新作例によつて例の如しといへば読者忽ちそんなら別に読むには及ぶまじとて手にせず。画工俳優音曲の諸芸家例によつて例の如くなれば益ますよし。小説

家例によつて例の如くなれば文運ここに尽く。小説家を以て世に立たんことまことに難し。

一 詩歌小説は創意を主とし技巧を賓とす。技芸は熟練を主として創意を賓とす。詩歌小説の作措辞老練に過ぎて創意乏しければ軽浮となる。然れどもいまだ全く排棄すべきに非らず。演技をなすもの素に創意する処を示さんとしてその手これに伴はざれば全く取るなきに了る。翻訳劇を演ずる俳優の技芸の如き、あるひはまた公設展覧会の賞牌を獲んとする画家の新作の如き即ちこれなり。

一 角力取老後を養ふに年寄の株あり。もし四本柱に坐する事を得ばこれ終を全くするもの。一身の幸福これより大なるはなけん。小説家その筆漸く意の如くならずその作また世に迎へられざるを知るや転じて批評の筆を取り他人の作を是非してお茶を濁す。事は四本柱の監査役と相同じくしてその実は然らず。一は退いて權威いよいよ強く一は転じて全くその面目を失ふ。

一 われら折々人に問はるる事あり。先生いつまで小説をかくおつもりなるや。よく根気がつづくものなりよく種がつきぬものなりと。これお世辞なるや冷嘲なるや我知らず。およそ小説と称するものその高尚難解なると通俗平易なるとの別なく共に世態人情

の觀察細微を極むるものなからざるべからず。高遠なる理想を主とする著作時として全く架空の事件を綴るものあるが如しといへども、行文こうぶんの中自ら作者の人間世間うらめずかに對する觀察の歴然として窺ふべきものあり。されば作者老いて世事に倦うみただ青山白雲を友としたきやうの考起かんがえり来きたれば文才の有無にかかはらず、小説の述作は自ら絶ゆべし。小説の生命は俗なる所にあり。人間に接する処にあり。世事に興味を有する所にあり。西洋の文学小説に重を置けども東洋においては然らざる所以ゆえんにけだし尋たずぬるに難からず。

一 柳亭種彦『田舎源氏』の稿を起せしは文政の末なり。然ればその齡よわい既に五十に

達せり。為永春水が『梅曆』を作りし時の齡を考ふるにまた相似たり。彼ら江

戸の戯作者いくつになつても色つぽい事にかけては引けを取らず。浮世絵師について見るに歌麿『吉原青楼年中行事』二巻の板下絵を描きしは五十前後即ち晩年の折

なり。我今彼らの芸術を品評せず唯その意氣を嘉よみしその勞を思ひその勇に感ず。

一 今の小説家筆持つ事をば勞作なりと称す。推敲は苦心なり固より樂事らくじにあらず然れども苦悶の中自らまた言外の慰樂の伴ともないきた来るものなきにあらず。文事を以てあたかも蟻の物を運ぶが如き勞働なりとなす所以ゆえんにわれらの到底解する能はざる所なり。工匠こうしやう匠じやうの家を建つるは勞働なり。然りといへども鑿のめ鉋こを手にするもの欣然きんぜんとしてその業を樂

しみに時に覚えず清きよ元もとでも口くちずさむほどなればその術つた必ず拙ちたからず。昔せき日の普ふ請しんと今

一 黄こう梅ばいの時とき節せつ漸ぜんく過かぐ、正ただに曝ばく書しよすべし。偶たま趙ちやう甌おう北ほくの詩し集しふを緡もとくに左ひだりの如ごとき絶

売文
〔文を売る〕

売文うりぶん錢せん稍しやう入い慳けん囊のう
〔文ぶんをうりてぜい稍しやうかけん囊のうにいり

欲ほつ破やぶ休ひ糧りやう秘ひ密みつ方ほう
糧りやうを休ちしひ秘みつ密ほうの方を破らんと欲す

楊よう子す江こう中ちゆう水すい雖い淺えん也と
楊よう子す江こう中ちゆうの水淺いしと雖も

※他それ一いっ勺しやく亦また何なん妨さまた妨げん
他それを一勺いっしやく亦またに亦た何ぞ妨げん

編詩
〔詩を編む〕

旧きゆう稿こう叢そう殘ぜん手て自すか編あ
〔旧きゆう稿こうの叢殘ぜんを手自すから編み

千せん金きん的てい護ご持じ堅かた
千せん金きんの的護ご持じすること堅かたし

可あわれ憐れ売う到が街がい頭とう去い去た
可あわれ憐れむ可しう売うりに街頭とうに到り去くも

尽ひね日もす無ひと人いっ出せん一い錢だ
尽ひね日もす無ひと人いっの一錢だを出すもの無し

一 市いち川かわ松しょう菴えん君くんこの頃このころ『本草ほんそう図譜ずふ』『草木そうぼく育種いくしゆ』『絵本えほん野山のやま草ぐさ』等とうに載のする所ところの我

邦在来の花卉を集めて庭に栽ゆ。君語つて曰く古めかしき草花は植木屋にたのみても中には間々その名をさへ忘れられしものなぞありて可笑しと。さもあるべし。向島の百花園なぞにても我国従来の秋草ばかりにては客足つかぬと見えて近頃は盛に西洋の草花を植雑へたり。日本の草花は温室咲の西洋草花に比すれば、その色淡泊その形瀟洒にて自らまた別種の趣あり。当世風の厚化粧入毛沢山の底髪にダイヤモンドドちりばめ女優好みの頬紅さしたるよりも洗髪に湯上りの薄化粧うれしく思ふ輩にはダリヤ、ベコニヤなんぞ呼ぶものよりも雪の下蜚草なぞのささやかなる花こそ夏には殊更好ましけれ。

一 つらつら四季を通じてわが国草木の花を見るに、西洋種の花に引比ぶれば、ここに自から特殊の色調あるを知る。牡丹芍薬の花極めて鮮妍なれどもその趣決してダリヤと同じからず、石榴花凌霄花宛ら猛火の炎々たるが如しといへどもそれは決して赤インキの如きにはあらず。牡丹の紅は加賀友禅の古色を思はしめ、石榴花の赤きは高僧のまとへる緋の衣の色に似たり。日本の花はいかほど色濃く鮮なるも何となく古めきていひがたき渋味あり。庭後庵庵主人好んで小鳥を飼ふ。かつて語りけるは小鳥もいろいろ集めて見る時は日本在来のものは羽毛の色皆渋しと。まことや鶯、繡眼兒、鶺鴒

高雀あおじの羽の緑なる、鳩るり、竹林鳥りの紫なる皆何物にも譬へがたなき色なり。今や世を挙げ
 て西洋模倣の粗悪なる毒々しき色彩衣服に書籍に家屋に器具にいたるところ 到 処 人の目を脅おびやかすに
 つけて、僅わずか兩三年前ぜんまではさほどにも思はざりける風土固有の温和なる色調、漸くその
 なつかしさを増し行かんとす。氣早きはやの人素みだりにわれらを以て好古癖うんぬんに捉はるるものとなす
 莫なかれ。われら真に良きものなれば何ぞ時の今古きんこと国の東西を云々うんぬんするの暇いとまあらんや。
 スペイン 西班牙に固有の 橙紅とうこうしよく色あり。仏蘭西フランスに固有の 銀鼠ぎんねずみいろ色あり。伊太利亞イタリアに固有の紅
 色あり。これ旅行者の一度ひとたびその国土に入るや 天然てんねんと芸術との別なく漫然として然も
 明瞭に認むる所なり。一国の風土は天然と人為とを包ほう合ごうして必ずここに固有の色を作
 らしむ。われらは我邦わがほうど土本来の面目の何たるかを知りこれを失はざらん事おもんばを慮おもんばかるに
 過ぎず。おのれの面目を知るはこれ即ち進んで他の面目の何たるかを窺ふの道たればな
 り。

大正五丙辰仲夏稿

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月〜1982（昭和57）年3月

※「漢詩文の訓読は蜂屋邦夫氏を煩わした。」旨の記載が、底本の編集付記にあります。

※ルビは新版名とする底本の扱いにそつて、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月8日作成

2010年11月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一夕
永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>